様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２６２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３４７８

研究課題名（和文）終末期がん患者の「希望を支援する目標志向型看護実践」の構造化と検証

研究課題名（英文）An examination of the structure of "the implementation of goal-oriented nursing care practices to support the intentions of terminal cancer patients".

研究代表者
片山　陽子（KATAYAMA, YOKO）

香川県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：３０４０３７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は終末期在宅がん患者の希望を支援するための目標志向型看護実践の構造化と検証である。在宅緩和ケアの先進地であるカナダBC州での調査と国内で終末期がん患者の在宅緩和ケアを担う訪問看護師への調査を実施した。その結果、BC州では患者の希望の表明のためAdvance Care Planningを実施、患者の希望の具現化にむけてチームアプローチを実施、わが国での展開の方略が課題となった。訪問看護師の調査から、訪問看護師は患者の希望の表明を支援し、臨床判断能力を基盤に予後予測した上で心身状態の安定化を図ると共に、日々のケアを通じ個別化した希望の具現化を目標として介入している構造が明確になった。

研究成果の概要（英文）：The present study aimed to examine the structure of the implementation of goal-oriented care to support the intentions of terminal cancer patients living at home. In the study, the following two surveys were implemented: a survey conducted in British Columbia, Canada, in which advanced home palliative care is provided, and another survey involving home-visiting nurses who provide terminal cancer patients living in Japan with home palliative care. According to the survey results, “Advance Care Planning” was conducted in B.C. to support patients express their hopes, and a team approach was implemented to embody their hopes. A survey was conducted to examine the structure of nursing care in Japan. To embody the patients’ hopes and recognize their requests, the nurses had adopted a problem-solving approach based for clinical judgment to stabilize the physical and psychological conditions, and provide intervention to fulfill specific requests as care goals in daily clinical settings.

研究分野：医歯薬学

キーワード：終末期　がん患者　ACP　訪問看護師　目標志向型実践　予後予測

１．研究開始当初の背景

終末期がん患者が最期まで自分らしい生活を送るためには、「こうありたい」と願う患者の希望を支えるケアが必要である。終末期がん患者の希望に関する研究は 1990 年代後半に開始されたばかりであり、国外では Wendy(2001)、Sarah, J(2007)などが終末期がん患者の希望の構造を示した。Sarah, J(2007)は､終末期がん患者が希望を持つことは QOL の向上に不可欠な要素であると指摘した。患者の希望を支えるケアは、患者の希望を目標とし、その実現を志向する看護実践が必要であり、それを日常生活圏である地域をベースに展開することは在宅緩和ケアの質を向上させる。在宅緩和ケアの先進地であるカナダ British Columbia 州（以下､BC 州）では、患者の希望をケア目標とした目標志向型ケアを地域で展開し、在宅での看取り率と患者の QOL の向上に貢献している（Canadian Home Care Association,2006）が、海外先進地でも患者の希望を中心におくことを明示しているのは BC 州のみであった。

国内においては､射場(2000)､水野（2003）らの研究がある。国外・国内の研究結果から終末期がん患者の希望は、文化や保健医療体制などの影響を受けることが推察されるが、わが国の文化背景などを踏まえた検証はされていない。目標志向型ケアにおける国内の動向については、老年看護などでは問題解決型志向の限界が示され、患者の主体性を引出す目標志向型実践の重要性が指摘され（近藤,2007、北川,2010）、終末期がん看護への有効性が示唆されるが検証はされていない。したがって、以下の点を明確化し検証することが課題である。

(1) 希望は、将来を見据えた時間的展望の性質をもつ概念であるが、終末期においても希望は存在することは明らかで、むしろ終末期において患者が自分らしく生き抜くために必要不可決なものである。しかし日本人終末期がん患者の希望についての研究は少なく検証すべき点が多い。

(2) 終末期がん患者は、複雑な心身状態と日常性の阻害による多くの課題を有する。その状況下で患者の QOL に貢献するアウトカムを導くには、訪問看護師がクリニカルアセスメントを基盤に介入のタイミングを計りながら、患者の希望や意向を汲み取り支援する実践の枠組みが必要である。

(3) 問題解決型の看護実践が中心の中、終末期がん患者の希望を見出し、それに向けた介入は、個々の看護師の経験知をもとに実践しているが、その実践知は可視化されていない。

(4) カナダ BC 州で実践し効果を得ている目標志向型実践は地域ベースのシステムであり、わが国の文化や保健医療体制に適合する実践的な日本型地域ベースのシステムを検討する。

以上のことから、日本の文化や保健医療体制を踏まえた上で、終末期がん患者の希望の概念と、その『希望を支援する看護師の目標志向型の看護実践』を明確化する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、わが国の終末期在宅がん患者の「こうありたい」と願う希望の概念を明らかにし、患者の希望を支援するための目標志向型看護実践の構造を明らかにすることである。終末期がん患者の希望を見出し支援することは『最期まで自分らしくありたい』と願う患者に寄り添う看護実践の根幹を担うものである。そして、国内外論文を分析統合し、海外先進地での質の高い実践の枠組みを基盤として実践構造を分析するで、日本独自の文化や保健医療体制において有効な看護実践を体系的に提示する。さらに、日本の実践家の検証により目標志向型看護実践の有用性を示すことで、患者個々の価値観や生活背景に即した終末期がん患者の希望を支援する看護実践の枠組みを明らかにすることが期待できる。

３．研究の方法

本研究目的を達成するために、平成 24 年度はがん患者の希望を中心においた看護実践に関する国内外の文献をレビューし、終末期患者の希望に関する目標志向型アプローチに関する既存資料を整理した。本研究では「がん患者の希望や意向の表出」に焦点を置き、希望や意向を表明することを支援するための実践として Advance Care Planning（以下、ACP）に着目し、ACP に関する文献レビューも実施した。平成 25 年度は文献レビューの結果を踏まえてがん患者の地域ケアを ACP の展開を基盤に実践しているカナダ BC 州でのフィールド調査を実施した。フィールド調査はカナダ BC 州でも在宅緩和ケアのシステムが整備されており、訪問看護師が中心になり ACP の実践を展開している BC 州ビクトリア地区とフレーザー地区で、在宅緩和ケアおよび ACP を展開している訪問看護師と ACP 担当者への同行訪問と参加観察及びインタビューを実施した。同時に日本では普及していない ACP の実践を理解するためカナダ BC 州において教育プログラムに参加し ACP 研修した。また、国内におけるがん患者の希望や意向の表明への支援の実態を検証するため訪問看護師を対象に質問紙調査を実施した。平成 26 年度はそれらの成果を基に、国内でのフィールド調査を行い患者の希望を中心においた目標志向型看護実践を実施している訪問看護師を対象にインタビュー調査を実施した。さらに地域において ACP を普及するための方略を検討するため先駆的に地域における ACP を展開しているシンガポール、ニュージーランド研修を実施すると共に、ACP を国のシステムとして導入を進めている台湾においても本研究の成果報告を行うなど段階的に進めた。

４．研究成果

(1) 終末期がん患者の『希望：Hope』の概念と、患者の『希望を支援する目標志向型看護実践』に関する既存資料からの明確化

平成 24 年度は、『終末期がん患者の希望』の概念の明確化と『目標志向型看護実践』の文献的検討を実施した。概念の明確化について、研究方法は Concept Exploration（Morse,2003）を用いて行った。Concept Exploration は、文献的レビューとフィールド調査を実施し、その結果をメタ統合した。結果、終末期がん患者の希望（Hope）の概念は、「前向きな期待の継続」「自らの生活のコントロール感」「ケアされている実感」「身体的な快適さ」など 10 カテゴリーが抽出された。『目標志向型看護実践』は「その人なりの希望を見い出しながら生活できること」や「終末期において、本人のみならず家族も満足が得られるためのケアのあり方」として有効であることが示唆された。そして、既存資料から患者の希望を中心においた目標志向型看護実践の具体的方略としては、1980 年代頃から開始された ACP が患者の希望の表明を支援し、それを看護の介入目標としてチームアプローチするために有効な方略であると明確となった。

(2) カナダ BC 州における ACP 教育担当者と実践者へのインタビュー調査と実践場面への参加観察

カナダ BC 州で実施している ACP の考え方と実践枠組みが「患者の希望や意思を明確化する実践」として有用であること平成 25 年度は①カナダ BC 州でのフィールド調査と ACP 教育担当者へのインタビュー調査と参加観察により、患者の希望や意思を明確化する方略として ACP が有用であることを検証することを試みた。結果、ACP の実践は患者の希望や意思を明確化するために有効であることが示唆された。終末期がん患者に対する訪問看護師の実践としてヘルスアセスメント及び予後予測スケールを用いてがん患

者の予後予測を行い、その判断を基に患者と家族に対して ACP を実践し「終末期を過ごしたい、最期を迎えたい場所」「受けたいケア」「日々の生活に関する希望」などの意向を確認、多職種カンファレンスで表出した希望や意向に基づくケアが可能となるように主治医、介護職等とチーム形成し協働していた。ACP の実践には教育的支援が必要であるため ACP 教育担当者にインタビューし、ACP の教育の必要性とプログラム内容を確認するとともに、教育プログラムに参加した。

(3) 国内におけるがん患者の希望や意向表明の支援の実態を検証するため訪問看護師を対象に質問紙調査を実施

【研究目的】本研究は、訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師による終末期在宅療養者及び家族への希望や意思の確認と、確認後の介入の実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】A 県下の訪問看護ステーションの訪問看護師 120 名を対象として無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は平成 25 年 9 月の 2 週間。調査票の回収率は 71%。調査内容は、基本的属性と希望や意向の確認の実施状況とその内容、介入状況、看護師の傾向と希望や意向の確認における困難事項とし、各項目の記述統計を算出した。

【結果と考察】対象者は平均年齢 42.4 歳（SD9.0)、訪問看護以外の臨床経験 12.8 年（SD8.0)、訪問看護経験 5.3 年（SD5.7)。療養者及び家族の希望や意思の確認は「必ず実施している」が 61.5%、「必要と判断した人のみ実施」が 25.6%。確認内容は「最期を迎えたい場所」が最も多く 83.3%で、次いで「終末期をすごしたい場所」76.9%だった。希望や意思の確認に関する看護師の傾向は「療養者本人と家族を同等に確認する」が 52.6%、次いで「本人より家族の意思を尊重する傾向」が 20.5%、「家族より本人の意思を尊重する傾向」14.1%で、確認後の介入は「意思に添うように介入」が 73.1%だった。意思確認の困難については「確認するタイミングの判断」が最も多く 75.6%で、「確認するスキル不足」が 44.9%だった。訪問看護師は，終末期において療養者と家族に最期を迎える場所を中心に意思確認し意思に添うよう介入していたが、一方で確認するタイミングの判断に迷い、その判断基準が必要であることが示唆された。

(4) Advance Care Planning（以下、ACP）のコンセプトを核とした「終末期がん患者の希望を支援する看護実践」の構造の明確化

平成 25 年に引き続き、ACP の文献検討及び ACP の海外先進国でフィールド調査を実施、患者の希望や意向を明確化するための支援枠組みを明らかにするためニュージーランドとシンガポールでフィールド調査を行った。ACP 担当者から教育支援や住民への普及方法と内容の基礎資料を得た。これらは引き続き分析し今後公表していく予定である。また、国内での訪問看護師へのインタビュー調査の分析を基に、我が国における終末期患者の希望を支援する看護実践の枠組みとして「終末期在宅療養者の尊厳と尊厳を守る訪問看護師の終末期ケアの実践」の検証に取り組んだ。本調査は、香川県立保健医療大学倫理委員会の承認を得て実施した。インタビュー対象は訪問看護師でかつ緩和ケアと訪問看護の認定看護師 8 名とし 19 事例の終末期療養者への実践データを得た。調査の結果、終末期在宅療養者の希望の表明を支援し、尊厳を守るための看護実践として「患者本人が指令塔である本人の希望を共有したチームを作る」「予測的に関わる」「本人の人生のプロセスを理解する」「過去の重要な情報をつなぐ」などの 10 コアカテゴリー27 サブカテゴリーが実践要素として抽出された。また、終末期がん患者の希望の支援には、がん患者の病状変化を的確にとらえ予測的に関わることの重要性を見出し、ターミナル期と看取り期の判断と予測指標の明確化を課題とした。そこでインタビュー調査でターミナル期と看取り期の判断と予測指標の実践知の明確化を行った。予後予測したターミナル期と

看取り期の2時点について、各々の判断指標とした症状等は事例をもとに質的記述的方法で分析した。研究結果として、ターミナル期は「労作後の回復の遅れ」「食事摂取量の減少と固形物の摂取困難」「病気の症状が進行」「体力や精神力の低下」などの「負のスパイラル」が生じる一方で「ケアや治療によって改善していた」「好きな嗜好品ややりたいことが出来ていた」などの兆候で判断していた。看取り期は、死亡約1か月から1週間前の期間で、「状態変化のスピードが速く、ケアしても改善しない」特に痰の貯留や尿量減少があった。また「意識レベルが低下」「水分も摂取困難」となり、家族の様子も「疲労の様子が強く」なると共に「本人も家族も死期を悟っていた」ことを捉えていた。以上から、訪問看護師はターミナル期、看取り期ともに身体症状や病気の症状の変化を捉えており、同じ身体症状でもその変化の程度やスピードの違いなど継続的に関わることで捉えられる徴候であった。そして本人の状態のみではなく、家族の様子や生活の状況もその変化を捉えて判断指標としていたことは生活や家族の状況も理解し実践するという訪問看護の特徴をあらわしていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

(1) 片山陽子、三浦雅美：看取り期の効果的な教育，看取り期の症状・観察・ケア，看護・介護職と家族の協働．臨床老年看護，査読無し，11月12月号，2014，67-73.

(2) Yoko Katayama, Barbara McLeod, Kelli I.Staduhar, Marcia Carr, Susan Cox-Russell, Sally Thorne：Providing Clinical On-Site Consultation in Home Palliative Care to Support Home Care Nurses: Learning from a Canadian Experience．ホスピスケアと在宅ケア，査読有り，Vol．20（通巻56号）第3号，2012，284-294

(3) 片山陽子，長江弘子：地域における緩和ケアの展開および緩和ケアコーディネーターの役割‐カナダBC州での研修報告．香川大学看護学雑誌，査読有り，Vol.17（通巻18号）第1号，2013．45-51

(4) 片山陽子：カナダ BC 州におけるアドバンス・ケア・プランニングの実践と教育の展開．香川県立保健医療大学雑誌，査読有り，第5巻，2014，37-43

〔学会発表〕（計 4 件）

(1) Yoko Katayama, Hiroko Nagae, Masako Sakai, Shinya Saito：The nursing practice of end-of-life care by visiting nurses who support the dying with dignity of their end-of-life elderly patients in home care．Conference of East Asian Forum of Nursing Scholars 2015 in Taipei, Taiwan，Feb．5-6，2015

(2) Yoko Katayama, Hiroko Nagae, Masako Sakai，Shinya Saito：Indicators for visiting nurses end-of-life elderly patients to determine whether patients are at the terminal-stage and aggravation-stage．Conference of East Asian Forum of Nursing Scholars 2015 in Taipei, Taiwan，Feb．5-6，2015

(3) 片山陽子、原明美、他：訪問看護師による終末期在宅療養者への意思確認と介入の実態. 第18回日本在宅ケア学会学術集会，3月，東京，2014

(4) 片山陽子、原明美、他：訪問看護ステーションで実施している教育の実態と訪問看護師がもつ教育支援ニーズ．第25回日本在宅医療学会学術集会，5月24，25日，岡山県，2014

６．研究組織
(1)研究代表者

片山　陽子（KATAYAMA YOKO）

香川県立保健医療大学・保健医療学部・
准教授
研究者番号：30403778

(2)研究分担者
長江　弘子（NAGAE　HIROKO）
千葉大学・大学院看護学研究科・特任教授
研究者番号：10265770

越田　美穂子（KOSHIDA　MIHOKO）
香川大学・医学部・准教授
研究者番号：30346639